

平成18～20年度SELHi研究開発実施報告書

- 1 SELHi 学校名 山口県立華陵高等学校
- 2 研究開発実施期間 平成18年度～平成20年度
- 3 研究開発課題 「確かな自己表現力を培うリーディング指導のための、質・量からのアプローチ及び評価方法の研究開発」～高大連携による研究・分析を通して～
- 4 研究開発課題の設定理由

1 現状分析

本校では平成15年度～17年度の3年間、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール(以下、SELHi)研究開発を行った。この先行研究では、英語科の生徒を対象に、生徒の自己表現力を伸ばすために、コミュニケーション活動に主眼を置いた指導方法を確立した。特に、スピーチ、スキット、ディベート、ディスカッションを授業で行った。生徒に到達目標を具体的に示し、教員の共通理解のもと、計画的・組織的に指導を行うことで顕著な教育効果を上げた。現在もこの研究成果を生かし、蓄積したマニュアルを活用・改善しながら、コミュニケーション活動に主眼を置いた授業の一層の充実を図っている。

2 課題

本研究開発を開始した平成18年度当初、本校の英語教育には次の2つの課題があった。

①リーディング指導の改善

本校が先行研究でめざしてきた生徒の自己表現力をより確かなものにするために、上記コミュニケーション活動に主眼を置いた指導を継続的に行うとともに、自己表現力の基礎を築くリーディング指導を改善すること。

②普通科における英語教育の改善

普通科のリーディングに主眼を置いた授業では、生徒が英語で自己表現する機会が少ないので、先行研究の英語科での成果を生かしつつ、自己表現の機会をさらに増やすこと。

3 研究開発課題の設定の理由（具体的にどのような仮説を立てたのか）

本研究開発では、リーディング指導の質と量を向上させることで、生徒のリーディング能力が向上するという仮説を立てた。まず、リーディング指導の「質」とは、「生徒が行う活動の質、及び教師の指導内容の質」と本研究開発では定義した。す

なわち、明確な目標を持ち、効果的な指導法で適切なワークシートを用いて活発な言語活動を促すことでリーディング授業の効果が上がると考えた。

他方、リーディング指導の「量」とは、「生徒が読む英文の量」と本研究開発では定義した。授業や多読プログラムを通して、生徒が読む英文の量を増やすことでリーディング能力及び自己表現力が向上すると予想した。

4 求められる成果（目標）

本研究開発においては、生徒の卒業時の到達目標を「英文を読んで、表面的な情報を読み取るだけでなく、概要を要約したり、意見を述べたり、感想をまとめたりすることができる」と設定した。

さらに、「高大連携による研究・分析」を柱とし、運営指導委員との共同研究開発を通して、リーディング指導のモデルを確立するとともに、全校生徒を対象に確かな自己表現力を培うことで、本校の存立基盤である英語教育の一層の充実を図り、さらに魅力的で特色ある学校づくりをめざしたいと考えた。

5 3年間の研究計画

研究開発の対象となる生徒：全校生徒

第一年次（平成18年度）

研究内容	研究方法
①生徒のリーディング能力の実態把握	①リーディングに関する意識調査，語彙レベルテスト，外部基準のコミュニケーション能力テストを利用して普通科・英語科それぞれの生徒のリーディング能力の実態把握を行う。
②リーディング教材の研究開発	②生徒の興味・関心やリーディング能力に応じた教材を開発する。 <ul style="list-style-type: none"> ・本校教員と大学教員からなる教材等開発研究委員会を設置し，生徒の興味・関心を喚起し，スピーチ，スキット，ディベート等のアウトプットを促すリーディング教材の研究開発を行う。 ・教材開発に際しては，語数・語彙レベル・レジスターの観点から易から難へ配列した，活動の目的に応じた教材を作成する。また，読む必然性のある教材を提示したり，意味のあるタスクを設定したりするように留意する。 ・語彙指導と併せて，「インプットの質と量」と「アウトプットの質と量」の相互作用及び相関関係について研究する。 ・ALTとの連携により，教科書の題材に関連した教材を開発する。 ・速読や多読等の目的に応じた教材を開発する。
③到達目標の検討及びシラバスの改善・充実	③高大連携による研究を通して，大学・社会で求められるリーディング能力を把握するとともに，本校生徒のリーディング能力の実態調査に基づいて，適切な到達目標を検討する。さらに，この目標に基づいて3年間を見通したシラバスのモデルを作成する。
④語彙指導の改善・充実	④教科書で扱われる語彙に加え，派生語，同義語，反意語等を包括的に扱う語彙指導を展開したり，学習した語彙を実際に使うことができるアウトプットの機会を設けたりして，語彙がより効果的に学習できるような工夫を試みる。

<p>⑤目的に応じたリーディング指導法の研究開発</p>	<p>⑤目的を意識したリーディング指導法を探る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の興味や関心に応じた、アウトプットを誘発する教材を提示することで、読後のタスクとして、要約、感想や意見等をスピーキングやライティングの形でアウトプットさせることに主眼を置いた指導 ・「ホームステイや修学旅行前の情報収集」「ディベートの論題に関する情報収集」等のプロジェクトを通じた指導 ・速読に主眼を置いた指導 ・スキミングやスキミング等の方法を用いながら、英文を読んで概要を把握したり、要約したりすることに主眼を置いた指導 ・文中の意味のまとめや指示語の内容を確認しながら読むことに主眼を置いた指導 ・英語教育講演会や大学の教員を招いてのワークショップの開催によるリーディング指導法の研究
<p>⑥多読等による背景知識の充実</p>	<p>⑥語彙のレベルが段階的に上がるリーディング教材の活用や、他教科との連携により、生徒の背景知識の充実を図る。</p>
<p>⑦リーディング指導におけるティーム・ティーチングの充実</p>	<p>⑦ALTとのティーム・ティーチングに関して様々な試みを行い、効果的な指導方法を探る。</p>
<p>⑧研究成果の公表</p>	<p>⑧研究成果をまとめ、公表を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業公開を行う。 ・インターネットで情報発信する。 ・英語教育に関する研究会等で研究発表を行う。
<p>⑨校内体制づくり</p>	<p>⑨週1回の英語科会議の開催により英語科教員の協働・推進体制を確立するとともに、職員会議等を通して研究開発の取組について全教職員に周知し、共通理解を図ることにより、協力体制を構築する。</p>

第二年次（平成19年度）

研究内容	研究方法
<p>①自己表現力を培うリーディング指導法の研究開発</p>	<p>①本校教員と大学教員からなるリーディング指導法研究委員会で、自己表現力の伸長を目的としたリーディング指導法を研究する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・インプットの質を高めるために、読後のタスクとして、要約、意見、感想をスピーキングやライティングでアウトプットさせることに主眼を置いた指導法について研究する。 ・インプットとアウトプットの記録をファイルに集積することで、「インプットの質と量」と「アウトプットの質と量」の相互作用について研究する。 ・大学教員を招いて教員対象のワークショップを開催し、教員の資質向上を図る。
<p>②多読指導の充実</p>	<p>②英文記事『華陵ウイークリー』及び「多読プログラム」を活用して多読指導の充実を図る。</p>

③シラバスの改善・充実	③第一年次（平成18年度）に設定した到達目標「英文を読んで、表面的な情報を読み取るだけでなく、概要を要約したり、意見を述べたり、感想をまとめることができる」ことを実現する3年間を見通したシラバスを構築する。
④生徒のリーディング能力の実態把握	④授業内評価，定期考査，外部基準のコミュニケーション能力テスト，語彙レベルテストを利用して生徒のリーディング能力の実態把握を行う。
⑤研究成果の公表	⑤研究成果をまとめ，公表を行う。 ・授業公開を行う。 ・インターネットで情報発信する。 ・英語教育に関する研究会等で研究発表を行う。

第三年次（平成20年度）

研究内容	研究方法
①自己表現力を培うリーディング指導法の研究開発	①本校教員と大学教員からなるリーディング指導法研究委員会で，自己表現力の伸長を目的としたリーディング指導法を確立する。 ・情報を的確に読み取ったり，要約，意見，感想をまとめることに主眼を置いた指導法を確立する。 ・大学教員を招いて生徒対象の特別授業や教員対象のワークショップを開催する。
②多読指導の充実	②多読指導の効果的な取組方法を提起する。 ・多読指導の効果について検証を行う。 ・平成21年度以降の『華陵ウイークリー』及び「多読プログラム」の効果的活用を継続するため，担当者マニュアルを作成する。
③シラバスの改善・充実	③到達目標「英文を読んで，表面的な情報を読み取るだけでなく，概要を要約したり，意見を述べたり，感想をまとめることができる」を実現する3年間を見通したシラバスを確立する。 ・到達目標に応じた3年間の効果的な指導のステップを確立する。
④生徒のリーディング能力の実態把握及び分析	④「華陵Can-Doテスト」，定期考査，外部基準のコミュニケーション能力テスト，語彙レベルテストを実施し能力の実態把握を行い，3年間の指導による能力の変容の分析を行う。
⑤研究成果の公表及び普及	⑤研究成果をまとめ，公表を行うとともに普及を図る。 ・研究成果報告会を開催する。 ・授業で用いたワークシートを研究資料として整理し，それを公表することにより研究成果の普及に努める。 ・授業公開を行う。 ・インターネットで情報発信する。 ・英語教育に関する研究会等で研究発表を行う。

6 研究開発の内容

研究開発の概要

平成18年度には、生徒の卒業時の到達目標を「英文を読んで、表面的な情報を読み取るだけでなく、概要を要約したり、意見を述べたり、感想をまとめたりすることができる」と設定した。

平成19年度には、この目標の達成に向けた過程を具体化するために「華陵Can-Doリスト」を作成するとともに、各学年での到達目標を英語科・普通科それぞれに設定した。

平成20年度には、「華陵Can-Doリスト」の各項目の達成状況を調べるために「華陵Can-Doテスト」を実施した。さらに、「華陵Can-Doリスト」に沿ったワークシートをまとめることで、生徒が行う言語活動を総括し、リーディング指導のモデルを確立した。

研究開発の詳細

第一年次（平成18年度）

平成18年度の実施計画書に掲げた①～⑨の項目それぞれについて取組の成果と課題を以下に示す。

①生徒のリーディング能力の実態把握について

- ・外部基準のコミュニケーション能力テスト及び語彙レベルテストを利用して普通科・英語科それぞれの生徒のリーディング能力及び語彙力の実態把握を行った。これらのテストを通して、初年度の基礎データの収集ができたため、今後、定期的に同一のテストを行うことで、リーディング能力の伸びを検証することが可能になった。
- ・また、定期考査の結果を分析して指導内容が定着しているかの評価を行った。平成19年度からは、生徒に学習の記録をポートフォリオにして残させ、それらも参考にしながら、より多角的に生徒のリーディング能力を把握することとした。
- ・さらに、リーディングに関する意識調査を実施した。しかしながら、生徒が回答したリーディングの到達目標は漠然としたものであったので、本研究開発における到達目標の妥当性の検証や教授法等への新たな示唆は得られなかった。

②リーディング教材の研究開発について

- ・平成18年度に設置した本校教員と運営指導委員を兼任する大学教員からなる教材等開発研究委員会は、後述の⑤「目的に応じたリーディング指導法の研究開発」に従事することとし、それに伴い、名称も平成19年度からは「リーディング指導法研究委員会」に改称することとした。
- ・当初計画していた教科書とは独立したリーディング教材の研究開発は取り止めた。リーディングに主眼を置く授業では既に科目の目的に応じた教科書を用いており、新たな教材を開発しても使用する時間が十分得られないからである。
- ・今後も生徒が興味・関心を持って読める教科書の選定を適切に行い、必要に応じて教科書と関連した英文を生徒に提示しながら、本研究開発を進めることとした。

③到達目標の検討及びシラバスの改善・充実について

- ・リーディング能力の実態調査，運営指導委員会，さらに，教員対象のワークショップでの議論を通して，本校生徒の到達目標を設定した。

＜卒業時の到達目標＞

「英文を読んで，表面的な情報を読み取るだけでなく，概要を要約したり，意見を述べたり，感想をまとめたりすることができる」

- ・アウトプットと関連した以下のような目標に重点を置きながら3年間のリーディング指導を行うとともに，1学年から最終到達目標を意識しながら，難度を高めつつ段階的に指導を行うように留意することとした。

＜学年ごとの重点目標＞

1学年：「表面的な情報が的確に読み取れること」

2学年：「概要が要約できること」

3学年：「意見を述べたり，感想をまとめたりすることができること」

④語彙指導の改善・充実

- ・リーディングにおいて語彙は重要な要素の一つであり，語彙リストやワークシート等を用いて継続的に語彙指導を行った。

⑤目的に応じたリーディング指導法の研究開発

- ・大学教員を招いて，生徒対象の特別授業を1回（平成18年9月），本校教員対象のリーディング指導に関するワークショップを3回（平成18年9月，平成19年1月・3月）開催した。
- ・教材等開発研究委員会（平成19年度から「リーディング指導法研究委員会」に改称）を運営指導委員会と同じ日程で，2回開催し，リーディング教材や評価方法に関して詳細な検討を行った。本研究開発の方向性を明確にし，内容を焦点化する上で，活発で有意義な議論が行われた。
- ・平成19年度から授業で用いたワークシートや評価に用いたテスト等を記録に残すことにした。これらを精査することで，「英文を読んで，表面的な情報を読み取るだけでなく，概要を要約したり，意見を述べたり，感想をまとめたりする」という自己表現活動と関連付けたリーディング指導のモデルを築きたいと考えた。
- ・なお，上記ワークシートには通し番号を付けたり，用紙サイズを統一したりして，生徒が整理しやすい工夫を行うこととした。

⑥多読等による背景知識の充実

- ・本校の多読指導には2つの柱がある。一つは『華陵ウイークリー』であり，もう一つは「多読プログラム」である。
- ・『華陵ウイークリー』は，平成15年度から毎週発行し，希望者が読めるようにしている400語程度の長さの英文記事である。平成18年度からは多読指導の一環として，生徒全員に配布し，定期考査でも取り上げて評価の対象とした。執筆は主に本校教員が行い，平成18年度は39回発行し，通算で154号になった。
- ・「多読プログラム」は，主に授業外で生徒に英文を読む機会を与えることを目的としている。平成19年度からの稼働をめざし，多読用図書を購入した。実際の運

用の際は、ワークシートを用いて読書の記録を付けさせたり、表彰を行ったりして生徒の意欲を高める工夫をすることとした。

- ・なお、平成19年度からは指導内容をよりの確に表現するために、この研究項目の見出しを「多読指導の充実」に改めた。

⑦リーディング指導におけるティーム・ティーチングの充実

- ・本校では英語科のみならず普通科でもリーディングに主眼を置いた授業で積極的にティーム・ティーチングを活用している。また、授業に関連した生徒の作文の添削指導をALTに依頼して、積極的にティーム・ティーチングの利点を生かしている。

⑧研究成果の公表

- ・平成18年度は通算5回の授業公開を行った。運営指導委員会に伴う研究授業を3回（平成18年6月・11月、平成19年2月）、生徒対象に大学から講師を招いて行った特別授業を1回（平成18年9月）及び文部科学省による実地調査に伴う研究授業を1回（平成18年10月）公開し、近隣の中学校、高等学校等から延べ50人程度の参観者があった。
- ・インターネットでの情報発信を平成18年9月から開始した。研究開発の概略を紹介する資料を随時掲載するとともに、ホームページ上の『華陵ウイークリー』を毎週更新した。

⑨校内体制づくり

- ・週1回の英語科会議を開き、英語科教員の協働推進体制を確立した。さらに、職員会議等を通して研究開発の取組について全教職員に周知し、共通理解を図ることにより、協力体制の基盤を構築した。

第二年次（平成19年度）

平成19年度の実施計画書に掲げた①～⑤の項目それぞれについて取組の成果と課題を以下に示す。

①自己表現力を培うリーディング指導法の研究開発

授業改善に係る取組

- ・平成18年度に設定した到達目標「英文を読んで、表面的な情報を読み取るだけでなく、概要を要約したり、意見を述べたり、感想をまとめたりすることができる」ことに主眼を置いたリーディング授業を実践した。例えば、キー・ワードやトピック・センテンスを見つけたり、読んだ内容をグラフィック・オーガナイザーを用いてまとめたり、キー・ワードを用いて要約したりするタスクを授業で積極的に行った。
- ・加えて、ペア・ワークを頻繁に用いて生徒が中心になって活動する場面を多く設けたので、生徒同士が協力しながら主体的にリーディングの活動に取り組むようになった。

- ・また、授業で使用したワークシートはファイルに綴じて学習の軌跡を記録させた。

リーディング指導法研究委員会での取組

- ・第1回リーディング指導法研究委員会では、到達目標が具体性に欠けるという6月のSELHi連絡協議会での指摘を受けて、「華陵Can-Doリスト」の作成に着手することを決定した。
- ・直ちに、運営指導委員と共働で「華陵Can-Doリスト」を完成させた。このリストでは「表面的な情報が的確に読み取れること」「概要が要約できること」「意見を述べたり、感想をまとめたりすることができること」という3つの観点から、論説文、物語文のそれぞれにおいて到達目標を細分化した。
- ・11月に「華陵Can-Doリスト」の各項目に対応した試作版「華陵Can-Doテスト」(Test 1, Test 2)を完成し実施した。結果を分析したところ、学年間の比較では、学年が上がるにつれて成績も向上していた。普通科と英語科の比較では、英語科が同学年の普通科より良い成績であった。
- ・第2回リーディング指導法研究委員会で上記Can-Doテストの結果報告を行った。さらに、このテストの妥当性を高めるため、トピック・センテンスを見つけたり、読んだことから推測したり、実際に要約を書いたりする問題を新たに追加し、12月にこの追加テスト(Test 3)を実施した。結果は、11月のテストと同様であった。
- ・第3回リーディング指導法研究委員会において、特に英文要約を中心とした指導法の研究をワークショップ形式で行った。

生徒対象の特別授業・教員対象のワークショップ

- ・以上の研究開発と並行して、年間計画に基づき、運営指導委員の大学教員等を講師として招き、生徒対象の特別授業を6回実施した。さらに、特別授業後に教員対象のワークショップを開催し、読後のタスクとして、要約、意見及び感想をアウトプットさせることに主眼を置いた指導法について研究した。
- ・これらの研究授業やワークショップは近隣の中学校、高等学校、大学の教員等にも公開し、参観者から好評を得た。また、参観者と活発な意見交換を行うことで、研究内容を発展させるヒントを得ることができた。

②多読指導の充実

- ・『華陵ウイークリー』及び「多読プログラム」の活用を継続して多読指導の充実を図った。
- ・『華陵ウイークリー』は、定期考査で内容についての問題を出題するばかりではなく、平成19年度からは、宿題として要約や感想を書かせたり、Karyo Weekly Liveと称して発行日の昼休みに校内放送で執筆者が記事を音読して各ホームルームに流したりして、生徒が英文に親しむ機会を増やしている。なお、平成19年度は38回発行し、通算で192号になった。
- ・「多読プログラム」は、主に多読用図書を用いて、平成19年度から開始した。目標語数を示し、1～2週間の多読期間を設けた後、ワークシートに読んだ語数と感想を記録させた。平成19年度は4回実施し、読んだ語数に応じて優秀者は表

彰し、啓発を図った。

③シラバスの改善・充実

- ・「華陵Can-Doリスト」により到達目標を具体化した。平成19年度の授業実践においては、各学年で生徒の実態に応じたワークシートを作成しながら、これらの目標に至るまでの指導方法について研究を行った。
- ・平成18年度に設定した学年ごとの重点目標という枠組は実態に合わないの見直しを図ることとした。なぜならば、1学年でも要約の初歩的な練習をしたり、簡単な意見を述べさせたりする活動は行うからである。従って、このような実態を反映した学年・学科ごとのレベル別シラバスを平成19年度中に完成させた。
- ・教員対象のワークショップで、運営指導委員と共同でワークシートの整理を行い、シラバスについての検討を行った。例えば、要約文の作成においては、「モデル要約文の空欄を埋める」、「文整序問題形式により要約文を完成する」などの基本的なタスクから、「決められた語数の英語でキー・ワードを用いて要約する」などの発展的なタスクまで、タスクのレベルを踏まえてワークシートを整理した。

④生徒のリーディング能力の実態把握

- ・「華陵Can-Doテスト」(Test 1, Test 2, Test 3)を作成し実施した。さらに、定期考査、外部基準のコミュニケーション能力テスト、語彙レベルテストを利用して生徒のリーディング能力の実態把握を行った。これらのテストの結果は過年度及び過回の結果と比較し分析することで指導効果の確認、指導計画の修正に役立った。

⑤研究成果の公表

- ・平成19年度は通算9回の授業公開（運営指導委員会に伴う研究授業3回、生徒対象に大学等からの講師による特別授業6回）において、近隣の中学校、高等学校、高等専門学校、大学等から延べ63人の参観者があった。
- ・インターネットを活用して、本校のホームページに研究開発の概略、「華陵Can-Doリスト」、各種テストの結果を紹介する資料を随時掲載するとともに、『華陵ウィークリー』を毎週更新した。
- ・11月に山口県高等学校教育研究会英語部会研究大会で研究成果の発表を行った。

第三年次（平成20年度）

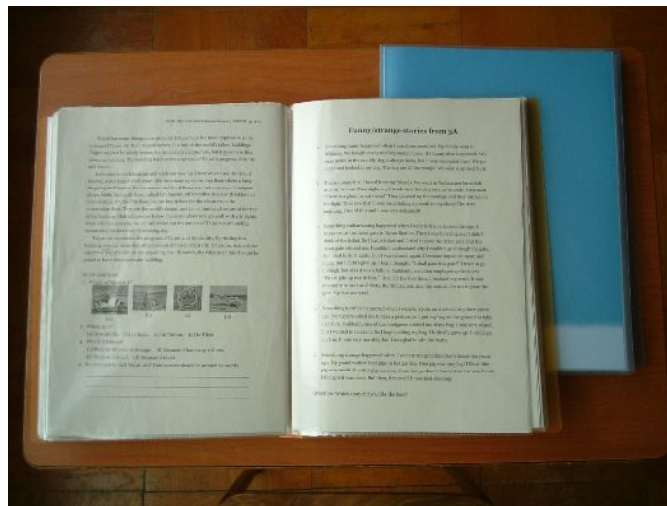
平成20年度の実施計画書に掲げた①～⑤の項目それぞれについて取組の成果と課題を以下に示す。

①自己表現力を培うリーディング指導法の研究開発

授業改善に係る取組

- ・平成18年度に設定した「英文を読んで、表面的な情報を読み取るだけでなく、概要を要約したり、意見を述べたり、感想をまとめたりすることができる」という到達目標に向けてリーディング授業を展開した。平成19年度に引き続き、キ

- ー・ワードやトピック・センテンスを見つけたり、読んだ内容をグラフィック・オーガナイザーを用いてまとめたり、キー・ワードを用いて要約したりするタスクを授業で積極的に行った。
- ・また、ペア・ワークに関しても、生徒が主体的にリーディングの活動に取り組めるように積極的に活用した。
 - ・さらに、授業で使用したワークシートは、ファイルに綴じて学習の軌跡を記録させた（写真参照）。



写真：ワークシートファイル

リーディング指導法研究委員会での取組

- ・第1回リーディング指導法研究委員会では、ワークシート集の編纂及び「華陵Can-Doテスト」(Test 4, Test 5) (添付資料10) 筆記部分の採点について運営指導委員から助言を得た。
- ・第2回リーディング指導法研究委員会では、それまでの授業で用いたワークシート集を点検し、運営指導委員から改善のための助言を得た。なお、このワークシート集は、11月に開催した研究成果発表会で資料として参加者に配布した。
- ・さらに、研究成果報告会で公開する研究授業のワークシートについても検討を行った。
- ・第3回リーディング指導法研究委員会においては、最終版のワークシート集 (添付資料4, 5) に関して助言を得た。レイアウトの工夫や時間配分の表示等、読者にとって分かりやすい工夫をすることが話し合われた。

生徒対象の特別授業・教員対象のワークショップ

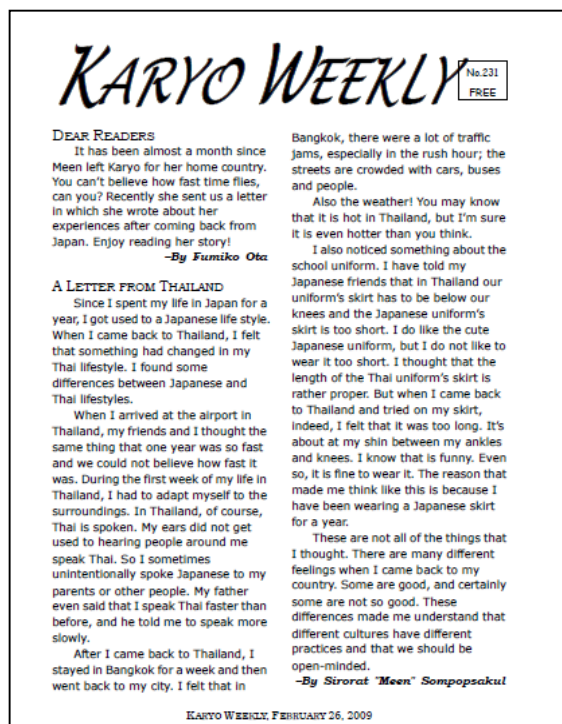
- ・運営指導委員の大学教員等を講師として招き、生徒対象の特別授業を3回実施した。また、特別授業後に教員対象のワークショップを行った。
- ・これらの研究授業やワークショップは近隣の中学校、高等学校、総合支援学校等の教員等にも公開し、研究成果の普及の機会とした。

②多読指導の充実

- ・平成18年度から継続的に『華陵ウイークリー』及び「多読プログラム」を活用して多読指導の充実を図った。
- ・『華陵ウイークリー』に関しては、(1)Karyo Weekly Liveと名付けた毎週の校内放送、(2)要約や感想を1000字の日本語で書かせる宿題、(3)定期考査での出題を通して生徒が英文に触れる機会をできるだけ多く確保した。なお、平成20年度は39回発行し、通算で231号になった。
- ・生徒は、『華陵ウイークリー』によって、身近な人の様々な話題についてのまとめ

った量の英文を定期的に読むことで、英文を読むことに対して抵抗感が少なくなった。

- ・「多読プログラム」(添付資料7-9)は、700冊程度の多読用図書を主に用いて、平成19年度から稼働している。目標語数を示し、1~2週間の多読期間を設けた後、ワークシートに読んだ語数と感想を記録させた。平成20年度は2回実施した。
- ・「多読プログラム」によって、生徒は英語の本を読んだという自信が付き、難易度のより高いレベルの本に挑戦する生徒が現れ、読むスピードも速くなってきた。
- ・今後、「多読プログラム」は授業でも適宜扱い、教員による読み聞かせ、人気のある図書の紹介、読み方の指導を行うなどして、積極的な多読を促したい。



③シラバスの改善・充実

- ・「華陵Can-Doリスト」(添付資料1)をもとに平成19年度に策定した学年・学科ごとのレベル別シラバス(添付資料2)による授業を行った。このシラバスによって、「英文を読んで、表面的な情報を読み取るだけでなく、概要を要約したり、意見を述べたり、感想をまとめたりすることができる」という到達目標までの段階に応じた目標が具体的になった。今後、必要に応じてシラバスの改善・充実を行う予定である。

④生徒のリーディング能力の実態把握及び分析

- ・「華陵Can-Doテスト」(添付資料10)を新たに作成し実施した。また、定期考査(添付資料12, 13), 外部基準のコミュニケーション能力テスト(添付資料14), 語彙レベルテスト(添付資料15)を利用して生徒のリーディング能力の実態把握を行った。これらのテストの結果を分析することで指導効果の確認, 指導計画の修正に役立てた。

⑤研究成果の公表及び普及

- ・インターネットを活用して、本校のホームページに研究開発の概略、「華陵Can-Doリスト」、各種テストの結果を紹介する資料を随時掲載するとともに、『華陵ウィークリー』を毎週更新した。さらに、研究成果発表会の案内も掲載し、受付も電子メールで行った。

華陵高校 : <http://www.karyo-h.ysn21.jp/>

セルハイ : <http://www.karyo-h.ysn21.jp/SELHiWeb/SELHi2006.htm>

- ・11月11日に山口県高等学校教育研究会英語部会研究大会で研究成果の発表（添付資料17）を行った。
- ・11月21日に研究成果発表会（添付資料18）を開催し、公開授業、基調講演、パネルディスカッション、質疑応答を通して研究成果を普及した。当日は、山口県内外の中学校、高等学校、総合支援学校、大学等から100人を超す参加者があった。
- ・別途、4回の授業公開（運営指導委員会に伴う研究授業1回、生徒対象に大学等からの講師による特別授業3回）において、近隣の中学校、高等学校、総合支援学校等から延べ34人の参観者があった。
- ・11月27日に山口県中学校英語教育研究大会で研究成果の発表を行った。
- ・平成20年度に新たに作成した「華陵Can-Doテスト」（添付資料10）については、問題文をすべて執筆したので、著作権の問題をクリアし、研究成果報告会や研究会で配布した。参考までに、平成19年度に作成した試作版は市販のテキストから問題文を選定したため、著作権上の配慮から外部への配布を控えた。
- ・本研究開発で得られた研究成果は他の学校に適用することが可能である。まず、「華陵Can-Doリスト」（添付資料1）をリーディングにおける指導や評価のチェックリストとして利用することができる。すなわち、「華陵Can-Doリスト」を指導や評価の指針とし、リーディングで求められる能力を育成しているかを点検することができる。
- ・次に、多読指導に関しても、「多読プログラム」の運営に関して、一つのモデルを示したと考えている。多読図書を購入に係る費用は、本研究開発においては文部科学省からの予算から支出したが、生徒から徴収することでどの学校でも運用可能である。また、『華陵ウイークリー』のような取組も生徒にとって英語を身近なものにする有効な手段であるとともに、教員の英語力向上の機会と捉えることもできる。
- ・最後に、今回の研究開発では、高大連携により、到達目標の設定、指導方法の改善、評価方法の開発を行った。近年では電子メール等を利用して勤務地がお互いに離れていても意見交換が容易になったので、高大の教員がチームとして研究開発を行う際の障害は少なくなったと考えられる。個々の教員の力量も授業が成功する上で重要な要素であるが、生徒が在学中の3年間で一定の成果を上げるには、教員が共通の目標を掲げチームで指導することが重要である。今回のような協働体制は、年間3回程度の対面会議を開催する予算があれば他の学校でも適用が可能である。

7 3年間の英語コミュニケーション能力の向上について

本調査研究の最終年度である平成20年度に、「華陵Can-Doリスト」(添付資料1)の各項目に対応した「華陵Can-Doテスト」(添付資料10)を作成し実施した。

さらに、下記のような日程でGTEC(ベネッセコーポレーション)、語彙レベルテストを実施し、生徒の英語のコミュニケーション能力の測定を行った(添付資料14, 15)。なお、語彙レベルテストはSchmitt, N., Schmitt, D., & Clapham, C.の“Developing and exploring the behaviour of two new versions of the Vocabulary Levels Test.” *Language Testing*, 18(1)をもとに2000語・3000語・アカデミック語彙の3つの分野でテストを行った。これらのテストは先行の研究開発(平成15年度～平成17年度)から継続して使用しており、研究対象の生徒のコミュニケーション能力の変容を把握するだけでなく、過年度生徒と比較することも可能である。以下に分析及び考察を述べる。

実施時期	テスト名
4月	「華陵Can-Doテスト」1回目
5月	語彙レベルテスト1回目
7月	GTEC(1年生BASIC, 2・3年生ADVANCED)
10月	「華陵Can-Doテスト」2回目
2月	語彙レベルテスト2回目

- (1) 「華陵Can-Doテスト」は全生徒を対象に4月と10月の2回実施した。また、すべての生徒の中から分析対象として120人(各学年40人、普通科と英語科が各20人)を無作為に抽出して、次の5つの項目に関して分析を行った。

① 論説文(客観式)	Test4	設問1～3	満点15点
② 論説文(筆記式)	Test4	設問4	満点10点
③ 物語文(客観式)	Test5	設問1～2	満点8点
④ 物語文(筆記式)	Test5	設問4	満点10点
⑤ 物語文(要約)	Test5	設問3	満点5点

なお、採点は華陵高校の英語科教員が行った。筆記式問題については、採点者による先入観を排除するため、生徒の名前は伏せ、さらに、学年・学科をランダムに並べ直した後に採点を行った。

分析結果は以下の通りである(詳細な分析結果は添付資料11を参照)。

① 論説文(客観式)に関する分析結果

論説文(客観式)における成績(試験の結果)は学年の進行とともに、有意($p < 0.001$)に上昇した。また、事前テストの成績より、事後テストの成績が有意($p < 0.001$)に高かった。

② 論説文(筆記式)に関する分析結果

論説文(筆記式)における成績は学年とともに、有意($p < 0.001$)に上昇した。英語科は普通科に比べ有意($p < 0.001$)に成績が良かった。また、事前テストより、事後テストの成績が有意($p < 0.001$)に高かった。

③ 物語文（客観式）に関する分析結果

物語文（客観式）における成績は学年が上がるとともに、有意（ $p < 0.001$ ）に上昇した（英語科は普通科より成績は良かったが、統計的には有意ではなかった）。また、事前テストより、事後テストの成績が有意（ $p < 0.001$ ）に高かった。

④ 物語文（筆記式）に関する分析結果

物語文（筆記式）における成績は学年が上がるとともに、有意（ $p < 0.001$ ）に上昇した。また、英語科は普通科に比べ有意（ $p < 0.001$ ）に成績が良かった。また、事前テストより、事後テストの成績が有意（ $p < 0.01$ ）に高かった。

⑤ 物語文（要約）に関する分析結果

物語文（要約）における成績は学年が上がるとともに、有意（ $F(2, 114) = 9.9$, $p < 0.001$ ）に上昇した。英語科は普通科に比べ有意（ $p < 0.01$ ）に成績が良かった。また、事前テストより、事後テストの成績が有意（ $p < 0.001$ ）に高かった。物語文（要約）に関しては、他の場合とことなり、学年と学科との間に有意な交互作用（ $p < 0.01$ ）が見られた。

(2) 定期考査は生徒のコミュニケーション能力を把握し、指導の効果を検証する効果的な手段である。リーディングに係る定期考査では、「華陵 Can-Do リスト」の項目を踏まえた問題を出題している（添付資料 1 2, 1 3）。

(3) GTEC（添付資料 1 4）のリーディング平均点に関しては、過回比較で 3 年英語科・普通科、2 年英語科・普通科のいずれの集団においても伸びが見られた。

なお、外部基準のコミュニケーション能力テストとして GTEC を使用した理由は 2 つある。第 1 に、GTEC を受験することで他校との成績の比較が可能であった。同テストは、測定結果の信頼性が高いことから、他の SELHi 校の多くが採用していた。第 2 に、本校では GTEC を平成 1 6 年度から実施しているため、過年度比較、過回比較を行うことができた。同テストは、リーディング、リスニング、ライティングの 3 分野で構成されており、それぞれの分野の成績の推移を検討することで、次の指導に生かすことができた。

ただし、GTEC で分析できなかった領域は、「華陵 Can-Do テスト」に基づくリーディング能力の伸長で、特に、読んだことをもとにアウトプットをする能力は GTEC では分析不可能であった。従って、この点を補うために「華陵 Can-Do テスト」を作成するに至った。

(4) 語彙レベルテスト（添付資料 1 5）に関しては、平成 2 0 年度の 2 回のテスト結果を比較するとどの集団も伸びを示した。また、平成 1 8 年度以来、2 0 0 0 語レベルでの平均点が合格点 2 5 点以上に達した集団がなかったが、平成 2 0 年度は 3 年生英語科が合格点に達し、語彙指導の成果が見られた。他の集団も順調に成績が伸びた。

8 校内の英語教育（特に授業）の改善状況

校内組織は、英語科教員を中心に協働体制が確立している。これは本研究開発が2回目の指定であることから、1回目での指定の経験を通して、協力の重要性を本校教員が認識しているからである。

平成18年度からの2回目の指定では、特にリーディングを中心にした英語教育の改善のために、週1回の英語科会議はもとより、運営指導委員会等における研究・研修の機会を十分に活用して、授業改善に努めた。

さらに、定期考査についても研究開発の実施後は「華陵 Can-Do リスト」を意識した問題形式で出題するようになった（添付資料12, 13）。これにより、指導と評価の一体化が図られた。

なお、以下のように、平成18年度からの3年間で（1）実地調査、研究成果報告会を含めて研究授業を12回、（2）本校教員対象のワークショップを15回実施した。

（1）研究授業

ア 第1回（平成18年6月26日）

- 3年A組（普通科）「リーディング」大田祐子教諭

教材：New Stage English Reading（池田書店）Part 1 Lesson 25: Platform 9 3/4

- 3年E組（英語科）「英語理解」山田芳彦教諭，ローレン・クリステンセン英語指導助手

教材：World Trek English Reading（桐原書店）Supplementary Reading 1: Death of the Classroom

イ 第2回（平成18年10月30日）*実地調査

- 1年E組（英語科）「総合英語」石田尚子教諭，ジェニファー・ニール英語指導助手

教材：New Steam I（増進堂）Lesson 9: Baseball Is Back!

- 3年B組（普通科）「英語Ⅱ」清木伸幸教諭

教材：2003年度 センター試験 追試験 第6問

ウ 第3回（平成18年11月27日）

- 2年B組（普通科）「英語Ⅱ」池永由紀教諭

教材：Vivid English Course II（第一学習社）Lesson 8: The Humanism of Kurosawa Akira

- 2年E組（英語科）「総合英語」片岡直史教諭

教材：Voyager English Course II（第一学習社）Lesson 9: Beyond our Limits

エ 第4回（平成19年2月19日）

- 1年B組（普通科）「英語Ⅰ」梅地哲郎教諭

教材：Tomorrow English Course II（啓林館）*早期採用 Lesson 4: Laughter as Medicine

- 1年E組（英語科）「総合英語」石田尚子教諭，ジェニファー・ニール英語指導助手

教材：Tomorrow English Course II（啓林館）*早期採用 Lesson 4: Laughter as Medicine

オ 第5回 (平成19年6月25日)

- 3年A組 (普通科)「リーディング」池永由紀教諭
教材: Vivid Reading (第一学習社) Lesson 5: Food and Culture
- 3年E組 (英語科)「異文化理解」片岡直史教諭, タビス・アレン英語指導助手
教材: Progress in English 21 Book 4(エデック) Lesson 4: Diogenes--Homeless by Choice

カ 第6回 (平成19年11月26日)

- 2年B組 (普通科)「英語Ⅱ」梅地哲郎教諭, ブレット・プロッツ英語指導助手
教材: Back to the Tap *自主教材
- 2年E組 (英語科)「英語理解」石田尚子教諭
教材: Progress in English 21 Book 3 (エデック) Lesson 7: The Long Road to the FIFA World Cup

キ 第7回 (平成20年1月16日) *実地調査

- 1年B組 (普通科)「英語Ⅰ」山田芳彦教諭, ブレット・プロッツ英語指導助手
教材: Big Dipper English Course II (数研出版) *早期採用 Lesson 2: Sports Trivia
- 3年A組 (普通科)「英語Ⅱ」清木伸幸教諭
教材: センター試験 過去問等 *自主教材

ク 第8回 (平成20年2月18日)

- 1年B組 (普通科)「英語Ⅰ」山田芳彦教諭, 大田史子教諭
教材: Big Dipper English Course II (数研出版) *早期採用 Lesson 4: Living with Animals
- 1年E組 (英語科)「総合英語」大田史子教諭
教材: Progress in English 21 Book 2 (エデック) Lesson 14: The Golden Gate Bridge

ケ 第9回 (平成20年6月23日)

- 3年B組 (普通科)「リーディング」梅地哲郎教諭, 石田尚子教諭
教材: Voyager Reading Course (第一学習社) Lesson 8: Ethnocentrism
- 3年E組 (英語科)「異文化理解」石田尚子教諭
教材: Progress in English 21 Book 4 (エデック) Lesson 6: "Seeing Is Believing" (?)

コ 第10回 (平成20年10月24日) *実地調査

- 2年B組 (普通科)「英語Ⅱ」山田芳彦教諭, 大田史子教諭
教材: Tomorrow English Course II (啓林館) Lesson 2: A Story of Tomatoes
- 3年E組 (英語科)「異文化理解」石田尚子教諭
教材: Progress in English 21 Book 4 (エデック) Lesson 7: The Last Leaf

サ 第11回 (平成20年11月21日) *研究成果報告会

- 1年B組 (普通科)「英語Ⅰ」片岡直史教諭, 橋本法子教諭
教材: World Trek English Course I (桐原書店) Lesson 8: Color Associations

- 1年E組（英語科）「総合英語」片岡直史教諭，ブレット・プロッツ英語指導助手
教材：Progress in English 21 Book 2（エデック）Lesson 10: Thanksgiving Day
- 2年B組（普通科）「英語Ⅱ」山田芳彦教諭，大田史子教諭
教材：Tomorrow English Course II（啓林館）Lesson 7: Making It Small
- 2年E組（英語科）「英語理解」山田芳彦教諭，大田史子教諭
教材：Progress in English 21 Book 3（エデック）Lesson 12: Diana, Princess of Wales
- 3年B組（普通科）「リーディング」梅地哲郎教諭，石田尚子教諭
教材：Love Song *自主教材
- 3年E組（英語科）「異文化理解」石田尚子教諭
教材：Progress in English 21 Book 4（エデック）Lesson 10: A Nobel Prize For Love

シ 第12回（平成21年2月16日）

- 1年A組（普通科）「英語Ⅰ」片岡直史教諭，橋本法子教諭
教材：World Trek English Course II（桐原書店）*早期採用 Lesson 1: Run, Yumeroman!
- 1年E組（英語科）「総合英語」片岡直史教諭
教材：World Trek English Course I（桐原書店）Lesson 9: A Plastic That Returns to the Earth

(2) 教員対象のワークショップ

ア 第1回（平成18年9月25日）

- 山口県立大学 ロバート・シャルコフ准教授
 - ・リーディングの生徒対象の特別授業に続いて，研究協議を行った。ペアワークのさせ方，ワークシートの作成法，ティーム・ティーチングの利用法に関して質疑応答を行い，その後のリーディング指導に多大な影響を与えた。

イ 第2回（平成19年1月23日）

- 県立広島大学 本岡直子准教授
 - ・リーディング指導に関する疑問点を事前に伝えておき，それらに関して専門家の立場から講義をしていただいた。リーディングにおける到達目標が明確になり，本研究開発を推進する上で重要な研究協議を行った。

ウ 第3回（平成19年3月23日）

- 山口大学 高橋俊章教授
 - ・平成19年度に使用予定の教科書を用いて，平成18年度に策定した到達目標「英文を読んで，表面的な情報を読み取るだけでなく，概要を要約したり，意見を述べたり，感想をまとめたりすることができる」ための具体的な指導法について研究協議を行った。

エ 第4回（平成19年5月23日）

- 広島市立舟入高等学校 西 巖弘教諭
 - ・近隣の中学校や高等学校の先生も交えて，西先生の授業観を中心に研究協

議を行った。「知育（覚える：暗唱）・徳育（自分の意見を持つ：即興発話）・体育（反復練習：音読）を意識しながら、常に教材と自分とのかかわりを考えさせる」という授業観を紹介された。

オ 第5回（平成19年6月18日）

○山口県立大学 ロバート・シャルコフ准教授

- ・より効果的にリーディングの授業を進めるための教授法について実践的なアドバイスを得た。具体的には、生徒を主体的にリーディング活動に取り組ませるにはどのようなタスクや活動が有効か、またワークシートはどのような工夫が必要かについて研修を積んだ。

カ 第6回（平成19年7月10日）

○広島大学 榎田一路准教授

- ・「華陵 Can-Do リスト」の案を示して、榎田先生に指導助言を得た。本校の実態に即した、より具体的で実践的な到達目標の設定に向けた研修ができた。

キ 第7回（平成19年9月19日）

○県立広島大学 本岡直子准教授

- ・中学校、高校学校、高等専門学校、大学の先生がそれぞれの立場から意見を交換した。中学校と高校学校の学習内容の隔たりや大学で求められる英語力について貴重な意見交換ができた。とりわけ英文和訳の是非について活発な議論がなされた。

ク 第8回（平成19年11月14日）

○山口大学 高橋俊章教授

- ・300語程度の長さの英文を読んで、要約に至るまでの活動と、様々な難易度の要約のタスクを紹介していただいた。教科書中の単語を空欄に補充する要約、トピック・センテンスを使った要約、部分的にパラフレーズする要約など実践的な教授法について研修を積んだ。

ケ 第9回（平成19年12月13日）

○山口県立大学 ロバート・シャルコフ准教授

- ・700語程度の英文を読んで要約する活動を紹介していただいた。トップダウン型(テーマ→詳細)の英文解釈の方法や、いくつかの要約の中から優れたものを選んでその理由を考察したり、不要語を削除することで要約を作成させたりする教授法等について研修を積んだ。

コ 第10回（平成20年1月18日）

○イエズス会福岡修道院 ロバート・キエサ院長

- ・本校英語科の教科書として使用している Progress in English 21 (エデック)の編纂の中心となられたキエサ先生から直接、教科書の構成、機能、使用方法について教授していただいた。教科書を最大限に利用し、4技能をバランスよく使って活動させることを強調された。

サ 第11回（平成20年3月13日）

○山口大学 高橋俊章教授・広島大学 榎田一路准教授

- ・テスト班とワークシート班に分かれて作業を行った。テスト班では、4月と10月に実施する「華陵 Can-Do テスト」(Test 4, Test 5)で、どの項目

をテストする問題を何問出題するのか明確にし、平成20年度に向けての準備作業を行った。一方、ワークシート班では、平成19年度に収集した授業ワークシートでどのような活動が行われたかを総括し、シラバスに反映する作業を行った。

シ 第12回 (平成20年5月22日)

○広島市立舟入高等学校 西 巖弘教諭

- ・近隣の高等学校や総合支援学校の先生を交えて、ワード・カウンターやリズム・ボックスを使用した音読の活動を紹介していただいた。ユーモアを交えながら展開されるテンポの良い授業で、音読による反復練習を通して生徒に学んだことを定着させる方法を提示していただいた。

ス 第13回 (平成20年6月30日)

○山口県立大学 ロバート・シャルコフ准教授

- ・効果的なワークシートの作成方法について具体的なアドバイスを得た(添付資料3)。様々な形式のワークシートとそれらを用いた活動例を示しながら、ワークショップ形式で研修を実施していただいた。

セ 第14回 (平成21年1月23日)

○山口大学 高橋俊章教授

- ・センター試験の問題を使い、語の意味の推測をはじめ、絵を使用して話の流れを理解するタスク、さらに、その絵やトピック・センテンスを利用して要約に結びつけるタスクを紹介していただいた。多くの情報の中から素早く話の流れをつかむ方法、部分的にパラフレーズする要約など実践的な教授法について研修を積んだ。

ソ 第15回 (平成21年2月20日)

○山口県立大学 ロバート・シャルコフ准教授

- ・教科書の文章を読んで、効率よく内容理解をするタスクを紹介していただいた。中でもグラフィック・オーガナイザーを使用して内容理解をした上で要約に結びつける活動が中心であった(添付資料16)。精読よりも、膨大な情報の中から必要とされる情報を素早く見つけ出させたり、大意をとらえて自分の言葉で表現させたりする教授法について研修を積んだ。

9 研究開発組織について

本校の研究開発組織は、(1) 運営指導委員会及び(2) 本校教員と大学教員からなるリーディング指導法研究委員会(平成18年度の名称は「教材等開発研究委員会」)の2つである。平成18年度は運営指導委員会を3回、教材等開発研究委員会を2回開催した。平成19年度からは、運営指導委員会とリーディング指導法研究委員会を3回ずつ開催した。

これらの委員会での審議を通して、生徒に求める到達目標及び研究方針が定まった。以下に討議内容や指導・助言事項等について年度ごとの要約を記述する。

第一年次(平成18年度)

(1) 運営指導委員会

ア 第1回(平成18年6月26日)

○インプットの質と量とアウトプットの質と量について

- ・インプットの質と量、アウトプットの質と量を測るためにどうしたらよいか。
- ・インプットの質＝「生徒に読ませる際のタスクの工夫＝教授法」

○リーディングの到達目標のイメージ

- ・「あるテキストを読んで、それに対して自分なりに内容を整理、分析した上で自分の意見が簡単に述べられるような能力」を求める。
- ・「アクティブ・リーディング」
 - *学習者が要約や意見を他人に伝えるためのリーディングにつながる教授法が必要。
 - *学習者自身がどうやって文章を整理したりまとめたりできるようになるのか。
 - *例えば、文章を図にしてまとめ、その図を使って発表させる。

・リーディングのレベルについて

レベル1(文字通り、情報をそのまま取り出す)

レベル2(推測して読む、行間読みとり、情報をまとめるため自らの加工が必要)

レベル3(意見、感想、解釈)

○教材等開発研究委員会について

- ・高大連携の二本柱＝指導法の開発、教材の開発
- ・教材開発：教科書以外のサブ教材、『華陵ウイークリー』
- ・生徒のレベルに合う、目的に応じた、語彙レベルやジャンルを様々に変えた教材開発。
- ・アウトプットを促すような教材を選ぶ。
- ・単独の教科書を作るかは検討する。

イ 第2回(平成18年11月27日)

○到達目標について

- ・Common European Framework の B2 レベルを目標にする。これでは分かりに

くいので、イメージとしては、Oxford Bookworm Series の Stage 4 を目標にする。

○教材開発のイメージ

- ・「リーディング・クックブック」を作り、使える活動やタスクを収集し記録する。

○独自のリーディング・テストについて

- ・教材等開発研究委員会で検討の結果、Bookworm の Stage 4 が読めるようになったかを確認するためには、独自テストを作成するよりは A C E や G T E C のスコアを利用するほうが優れていると判断した。
- ・スキル獲得の小テストを授業後に実施し、定期考査ではそれらのスキルを同じ形式で問い、定着したかどうかを確認する。

ウ 第3回（平成19年2月19日）

○研究授業での指導法について

- ・生徒の活動が増えていたのがよい。生徒の活動を教員がしっかり見守っていた。ワークシートをもう少し上手に使うとよかった。
- ・教員主体で生徒が黙っている場面が多かった。活動にバリエーションが欲しい。リーディングの授業は教員主導になってしまうので生徒がもっと授業に積極的に参加できる工夫を。

○インプットとアウトプットの相互作用について

- ・「インプット・ファイル」に授業で用いたワークシートを、「アウトプット・ファイル」に要約、エッセイ等の作品を集積するという2本立てで解決してはどうか。
- ・現段階では、アウトプットの定義付けがもっと必要では？

○評価について

- ・学校独自の測定テストをつくらなくてはならないのではないか？ G T E C 等は副で、定期考査などを主にするという手もある。自己表現力を測るものが存在しなくてはならない。時間をかけて作成してはどうか。
- ・定期考査のなかに評価してみたい項目を取り込んでみるのもよい。例えば、サマリーなどをテストでも出題する。

(2) 教材等開発研究委員会

ア 第1回（平成18年11月27日）

○進捗状況の報告

○「リーディング・クックブック」について

- ・章立てに沿って、使える活動やタスクを収集し記録する。

○独自のリーディング・テストについて

- ・実際にサンプルを作成して検討したが、テストの信頼性において外部基準のテストの方が優れていると判断した。個別のスキルが身に付いたかどうかを確認するのであれば、一般的なリーディング力を測る外部基準のテストや独自テストを用いるより、授業や定期考査でチェックする方がよいという結論に達した。

イ 第2回（平成19年2月19日）

○本委員会の在り方について

- ・本委員会は、平成19年度からは、「自己表現力を培うリーディング指導法の研究開発」に従事することとする。名称も委員会の機能に合わせ、「リーディング指導法研究委員会」に改称する。

○平成19年度実施計画書について

- ・第3回運営指導委員会に先がけて、平成18年度研究開発の進捗状況について精査するとともに、平成19年度の実実施計画に関して方針の確認を行った。

第二年次（平成19年度）

(1) 運営指導委員会

ア 第1回（平成19年6月25日）

○確かな自己表現力を測定する評価法に関して

- ・リーディングの授業から派生する自己表現力（スピーキング能力・ライティング能力）を測定し、それらとリーディング能力との関連性を明らかにすべきである。

○全教員で年次ごとの重点目標や基準を共有し、評価方法を確立することが必要である。

○指導後の変化を見るデータに関して

- ・ワークシート、小テスト、定期考査は連動しているので、それらの相関を見る必要がある。
- ・活動の成果が確かめられるように、ワークシートをファイリングすることも必要である。

○「華陵 Can-Do リスト」の作成が急務

- ・Can-Do リストを基準に授業で用いるワークシートを作る必要がある。

イ 第2回（平成19年11月26日）

○「華陵 Can-Do リスト」の作成及び「華陵 Can-Do テスト」(Test 1, Test 2)の実施結果報告に対して

- ・Can-Do テストにより発見された弱点を指導する方法を早急に検討すべきである。
- ・Can-Do リストに沿ったワークシートの蓄積が必要である。

○Summary の作り方の指導について

- ・①「英文の大切なところに線を引かせる」②「1文にまとめさせる」③「絵を描かせる」等の指導法を段階に応じて用いるとよい。

ウ 第3回（平成20年2月18日）

○①自己表現力を培うリーディング指導法の研究開発（授業改善、リーディング指導法研究委員会、生徒対象の特別授業、教員対象のワークショップの実施）、②多読指導の工夫、③授業公開の状況についての報告に対して

- ・現状では、シラバスの改善充実が最も大きな課題である。

- ・授業で使用したワークシートをわかりやすく整理して冊子を作成し、他校の英語教員がいつでも利用できるように工夫すべきである。
- ・協議を重ねて、より信頼性・妥当性の高い「華陵 Can-Do テスト」をめざすべきである。運営指導委員は協力を惜しまない。

(2) リーディング指導法研究委員会

ア 第1回 (平成19年6月25日)

○SELHi 連絡協議会について

- ・協議会で指摘された課題について論議した。特に、各学年の重点目標として掲げた内容の関連や順序について、運営指導委員に助言・指導を仰いだ。その結果、Can-Do リストを作成して、「表面的な情報が的確に読み取れること」「概要が要約できること」「意見を述べたり感想をまとめたりできること」という重点目標のそれぞれについて、下位スキルの検討を行うことにした。

○授業で使用しているワークシートについて

- ・教員が授業で使用しているワークシートを持ち寄って検討した。今回の研究開発課題に照らし合わせて、それぞれのワークシートの効果を検証した。その結果、概要の要約、意見や感想の産出に結びつくタスクを授業でさらに扱う必要性があることが分かった。

イ 第2回 (平成19年11月26日)

○「華陵 Can-Do テスト」(Test 1, Test 2)について

- ・運営指導委員からテストの信頼性と妥当性を高めるための以下のような助言を得た。
 - ①指導と評価の一体化を常に念頭に置きテストを作成すること
 - ②「華陵 Can-Do リスト」に対応したものを作成すること
 - ③質問の形式を工夫すること。答えがすぐ見つかるような質問だけでなく、推測を伴う問題も取り入れること
 - ④グラフィック・オーガナイザーは別の形式(比較対象)でもテストを作成すること
 - ⑤要約は、自由度を制限した問題(partial summary, partial paraphrase)を取り入れること
 - ⑥成績の上位群と下位群の正誤率を比較分析して信頼度を高めること
 - ⑦同じレベルのテストを2種類作成し、結果の比較を行うこと
 - ⑧テストは来年度2回実施し、指導の効果を検証すること

ウ 第3回 (平成20年2月18日)

○要約についてのワークショップ

- ・英文の要約について、効果的かつ実践的な指導の手順や評価方法についての研修を積んだ。

○シラバスについて

- ・シラバスを作成するにあたって、既存の評価体系、ヨーロッパ言語ポートフォリオ(European Language Portfolio: ELP)を参考にするとよいという助言を得た。

第三年次（平成20年度）

本校の研究開発組織は、（１）運営指導委員会及び（２）本校教員と大学教員からなるリーディング指導法研究委員会の２つである。平成20年度は運営指導委員会を3回、リーディング指導法研究委員会を3回開催した。以下に討議内容や指導・助言のポイントをまとめる。

（１）運営指導委員会

ア 第1回（平成20年6月23日）

○研究成果報告会について

- ・公開授業では、授業の目標を絞ることが必要であろう。
- ・中学校の教員にも参考になるように、授業を工夫すべきである。
- ・講演とパネルディスカッション、生徒の活動の様子が分かるポスターセッションを含めると良いと思われる。

イ 第2回（平成20年11月10日）

○研究成果報告会について

- ・パネルディスカッションに関しては、①研究開発の概要の説明、②「華陵 Can-Do リスト」の説明、③そのリストを具現化するワークシート作成上の心得、④東京外国語大学大学院教授根岸雅史先生の総括、⑤質疑応答という大筋の流れを決定した。
- ・パネルディスカッションにおいては、アウトプットを意識した華陵高等学校モデルと大学受験との関係、他校でもできる取組方法の提示等のトピックを扱うことを決定した。

ウ 第3回（平成21年2月16日）

○研究成果報告会について

- ・公開授業、東京外国語大学大学院の根岸先生による基調講演、パネルディスカッションは、運営指導委員、教員、生徒の協力で成功に終わった。県内外の中学校、高等学校、総合支援学校、大学等からの参加者は100人を超えた。

○英語力の伸長について

- ・「華陵 Can-Do テスト」（4月、10月）、語彙レベルテスト、GTECのいずれでも英語力の伸びが見られる。

○報告書について

- ・物語文班は「最後の一葉」、論説文班はセンター試験の第6問を使い、「華陵 Can-Do リスト」に沿ったワークシート集を3月末までに完成する。
- ・3月末までに平成20年度の報告書及び3年間の報告書をまとめて文部科学省に提出する。

○これからの取組について

- ・SELHi終了後の取組について、高校から見た高大連携の視点を提案していくことが必要になってくる。
- ・地域連携、高大連携について、運営指導委員はこれからも協力を惜しまない。

(2) リーディング指導法研究委員会

ア 第1回 (平成20年6月23日)

- 「華陵 Can-Do リスト」に沿ったワークシート作成の工夫
 - ・内容理解を訳読ではない様々な方法で図るワークシートの工夫が必要である。
 - ・ワークシートを全教員でお互いに検討することが、改善の近道である。
- 「華陵 Can-Do テスト」について
 - ・何人かの答案を選んでサンプリング評価を行い、筆記部分の評価規準の共有化を図る。
 - ・大学生の被験者にテストを受けてもらい、同一のテストを2回受けることによる学習効果の有無を検証する。

イ 第2回 (平成20年11月10日)

- 「ワークシート集」について
 - ・「華陵 Can-Do リスト」に沿った、わかりやすいワークシート集を完成させるため、運営委員会から以下のような助言を得た。
 - ①見やすいようにレイアウトを統一すること
 - ②生徒への指示は省き、ワークシートの使用法にそれぞれ半ページを割くこと
 - ③そのタスクを選んだ理由と根拠を明示すること
 - ④最終的にアウトプットのタスクにつながる課題設定をすること
 - ⑤「華陵 Can-Do リスト」のどの部分にあたる課題なのかを明示すること

ウ 第3回 (平成21年2月16日)

- 「ワークシート集」について
 - ・最終版のワークシート集に関して、改善のための以下のような助言を得た。
 - ①使用パッセージの著作権の確認
 - ②タスクの目的を目立たせるために解説部分のレイアウトを工夫すること
 - ③タスクごとの時間配分、模範解答、単元の流れを解説部分かワークシート自体に明示すること
 - ④プレリーディングアクティビティを加えること
 - ⑤多彩な課題になるように工夫をすること
- 平成21年度新規事業に関する指導助言
 - ・華陵高校での3年間に加えて、大学1・2年でも語彙レベルテスト、Can-Doテストを行うこと
 - ・大学でも Can-Do リストを作成して、高校の指導と大学の指導をスムーズに行うこと

10 外部講師の講演、授業外活動等の記録

平成18年度からの3年間で、授業外活動として(1)外部講師による特別授業、(2)夏期語学セミナー、(3)海外ホームステイ研修を実施した。

(1) 外部講師による特別授業

平成18年度からの3年間で10回の特別授業を実施した。これらの特別授業は近隣の中学校、高等学校、大学等に案内を送付して公開で行った。さらに、講師の先生方には特別授業後にリーディングに関するワークショップを本校及び近隣の教員を対象に行ってもらった。

ア 第1回(平成18年9月25日)ロバート・シャルコフ准教授(山口県立大学)

- 2年B組(普通科)「英語Ⅱ」

教材: Voyager English Course II (第一学習社) Lesson 6: Selling a Product

イ 第2回(平成19年5月23日)西 巖弘教諭(広島市立舟入高等学校)

- 2年A組(普通科)「英語Ⅱ」

教材: Tomorrow English Course II (啓林館) Lesson 8: Proverbs in a Painting

- 2年B組(普通科)「英語Ⅱ」同上

- 2年E組(英語科)「英語理解」同上

ウ 第3回(平成19年6月18日)ロバート・シャルコフ准教授(山口県立大学)

- 3年A組(普通科)「リーディング」

教材: Sir Isaac Newton (シャルコフ先生に用意していただいた教材)

- 3年B組(普通科)「リーディング」同上

- 3年E組(英語科)「異文化理解」

教材: Progress in English 21 Book 4 (エデック) Summary of the Subjunctive (pp. 66-67)

エ 第4回(平成19年7月10日)榎田一路准教授(広島大学)

- 3年A組(普通科)「リーディング」

教材: 「英文を効率よく読むコツーGTEC for Students Part B 対策ー」
(榎田先生に用意していただいた教材)

- 3年B組(普通科)「リーディング」同上

- 3年E組(英語科)「異文化理解」同上

オ 第5回(平成19年9月19日)本岡直子准教授(県立広島大学)

- 1年A組(普通科)「英語Ⅰ」

教材: Vivid English Course I (第一学習社) Lesson 6: Queen of Subtitle Translation

- 1年B組(普通科)「英語Ⅰ」同上

- 1年E組(英語科)「総合英語」

教材: Progress in English 21 Book 2 (エデック) Lesson 6: Martin Luther King

カ 第6回(平成19年11月14日)高橋俊章教授(山口大学)

- 1年A組(普通科)「英語Ⅰ」

教材：Vivid English Course I (第一学習社) Lesson 9: Organ Transplants

○1年B組 (普通科)「英語Ⅰ」同上

○1年E組 (英語科)「総合英語」

教材：Progress in English 21 Book 2 (エデック) Lesson 10: Thanksgiving Day

キ 第7回 (平成19年12月13日) ロバート・シャルコフ准教授 (山口県立大学)

○2年A組 (普通科)「英語Ⅱ」

教材：Christmas Day in the Morning *自主教材

○2年B組 (普通科)「英語Ⅱ」同上

○2年E組 (英語科)「英語理解」同上

ク 第8回 (平成20年5月22日) 西 徹弘教諭 (広島市立舟入高等学校)

○2年A組 (普通科)「英語Ⅱ」

教材：Big Dipper English Course II (数研出版) Lesson 7: The World of Heritage

○2年B組 (普通科)「英語Ⅱ」同上

○2年E組 (英語科)「英語理解」

教材：Progress in English 21 Book 3 (エデック) Lesson 3: An Amazing Detective

ケ 第9回 (平成21年1月23日) 高橋俊章教授 (山口大学)

○2年A組 (普通科)「英語Ⅱ」

教材：センター試験2008年度リスニングテスト2008第4問Bの本文

○2年E組 (英語科)「英語理解」同上

コ 第10回 (平成21年2月20日) ロバート・シャルコフ准教授 (山口県立大学)

○1年A組 (普通科)「英語Ⅰ」

教材：Tomorrow English Course II (啓林館) Lesson 4: Laughter as Medicine
(添付資料16)

○1年B組 (普通科)「英語Ⅰ」同上

○1年E組 (英語科)「総合英語」同上

(2) 夏期語学セミナー

2泊3日の夏期語学セミナーでは、ゲーム、プレゼンテーション、ワークショップ等を通じ、英語力の向上をめざした指導を行った(添付資料19)。

平成18年度は、1年生49人(英語科全員、普通科希望者)、アシスタントとして留学生2人が参加し、8月22日～24日に実施した。生徒約10人を1人のALTが担当した。なお、27人の市内中学生が合同参加した。

平成19年度は、1年生59人(英語科全員、普通科希望者)、アシスタントとして留学生1人が参加し、8月21日～23日に実施した。生徒約9人を1人のALTが担当した。なお、24人の市内中学生が合同参加した。

平成20年度は1年生56人(英語科全員、普通科希望者)、アシスタントとして留学生1人が参加し、8月19日～21日に実施した。生徒約9人を1人のA

LTが担当した。なお、23人の市内中学生が合同参加した。

(3) 海外ホームステイ研修

海外ホームステイ研修は、2年生の希望者を対象に夏季休業中にオーストラリアのブリズベン近郊で実施した。英語運用能力を高めるだけでなく、異文化に長期間浸る体験を通して多様な価値観の認識と国際意識の高揚を図った（添付資料20）。

平成18年度は、21人の希望者を対象に、7月21日～8月11日（22日間）に実施した。参加者は、ホームステイしながら、6～8人につき1人の講師（ESL有資格者）が指導する語学研修をはじめ、現地学校の児童・生徒及び老人ホーム利用者との交流活動、アボリジニ文化体験学習、フィールド・トリップ等に参加した。

平成19年度は、11人の希望者を対象に、7月23日～8月6日（15日間）に実施した。参加者は、ホームステイしながら、現地高等学校での語学研修をはじめ、生徒との交流や授業参加、フィールド・トリップ等を行った。

平成20年度は、19人の希望者を対象に、7月22日～8月11日（21日間）に実施した。参加者は、ホームステイしながら、前年度と同様の研修を行った。

山口県立華陵高等学校

平成18～20年度SELHi研究開発関係者

運営指導組織

高橋俊章	山口大学教授
ロバート・シャルコフ	山口県立大学准教授
本岡直子	県立広島大学准教授
榎田一路	広島大学准教授
蔵重伸	池坊短期大学教授
三吉英太	山口県教育庁高校教育課課長
川野あきら	やまぐち総合教育支援センター次長
蔵本隆博	山口県立華陵高等学校校長

研究組織

清木伸幸	山口県教育庁高校教育課指導主事
山根敬二	山口県立華陵高等学校教頭
吉本晃	山口県立美祢高等学校教頭
山田芳彦	山口県立華陵高等学校教諭
梅地哲郎	//
片岡直史	//
石田尚子	//
大田史子	//
河村かよ子	//
橋本法子	//
大田祐子	山口県立柳井高等学校教諭
藤安由紀	山口県立西京高等学校教諭
ブレット・プロッツ	山口県立華陵高等学校外国語指導助手
トーマス・ロジャース	元山口県立華陵高等学校外国語指導助手
ローレン・クリステンセン	//
ジェニファー・ニール	//